

令和7年度 第1回堺市文化芸術審議会 議事録

1 開催日時

令和7年6月10日（火）10時00分～12時00分

2 開催場所

フェニーチェ堺 多目的室

3 出席委員（50音順）

雨森 信 委員	（インディペンデントキュレーター）
さいとう しのぶ 委員	（絵本作家）
永井 泉 委員	（公募委員）
永島 茜 委員	（武庫川女子大学准教授）
坂東 亜矢子 会長代理	（演劇評論家）
藤野 一夫 会長	（神戸大学名誉教授 芸術文化観光専門職大学名誉教授）
藤原 麻喜子 委員	（公募委員）
山口 洋典 委員	（立命館大学共通教育推進機構教授）

4 出席議事関係者（50音順・敬称略）

上田 假奈代 （堺アーツカウンシル プログラム・ディレクター）

5 事務局職員

文化観光局長、文化国際部長、文化課長、文化課長補佐、文化課企画係長 ほか

6 関係者

公益財団法人堺市文化振興財団事務局長、総務課長、事業課長、事業課係長、堺市民芸術文化ホール副館長、企画制作担当課長

7 議題

（1） 第2期堺文化芸術推進計画の最終評価案について

(2) 第3期堺文化芸術推進計画の策定案について

8 議事録要旨

開会

<事務局より説明>

議題

(1) 第2期堺文化芸術推進計画の最終評価案について

◎藤野会長

早速議事に入りたいと思います。

議題が2つございまして、1つが第2期の堺文化芸術振興計画の最終評価案というものです。2つ目が第3期堺文化芸術推進計画の策定案についてということになります。それでは、「議題(1)第2期の推進計画の最終評価案について」審議したいと思いますので、事務局からご説明をお願いいたします。

<事務局から説明>

◎藤野会長

はい、ありがとうございます。10ページから13ページにわたってが、最終評価ということになっています。

私もチェックしたのですが、当事者に対して一部上から目線になってしまっているところは申し訳ないなと思っております。12ページの上から10行目ぐらいに、このアーツカウンシル及び堺市文化芸術活動応援補助金ともに市民の間に十分に浸透しているとは言えないというふうに書かれています。文化芸術振興とか施策の面で十分に浸透しているというのは一体どういうことなのかという、そもそも、こういうのはその数値で表せるものなのかどうかというのは、すごく難しいなと思いました。市政モニターとかで、それほど知られていないという結果が出たので、十分に浸透しているとは言えないということです。じゃあ、他市と比較してどうなのかということがエビデンスとして出ている訳ではない訳です。ですから、十分に浸透している状態というのは一体何なのかということもしっかり考えなければと思っています。

堺の歴史文化資源に対する認知度が十分ではないということについてはどうなのでしょう。市内の人たちにとって十分ではないという面と、外から来られるインバウンド観光客も含めて、外から見て認知度が十分ではないということが、事実として言えるとしたら、どうやってその認知度を上げていけば良いのか。文化観光みたいなことをどうやって仕組作りをしていったのかということも、具体的に考えながらチェックをしていきました。

まずは皆さんの方から忌憚のないご意見をいただければと思います。よろしくお願いいたします。

○山口委員

資料の作成ありがとうございます。確認ですが、13 ページの下から 11 行目にある「繰り返しになるが」の部分について、何を繰り返し述べているかが不明瞭な印象です。文案では「当初の目標値が適切であったか」と「評価指標」の 2 つを再考すべきだと記されていますが、この部分までに触れられているのは、10 ページの下から 4 行目の「目標値の設定そのものに根拠があったかどうかは再考する必要がある」という部分です。したがって、評価指標についてはここで初めて述べられているため、「繰り返し」という表現で目標値と評価指標の 2 つに触れるのは適切ではないと思われます。

一方で、前回の審議会でも議論しましたが、評価については指標だけでなく手法についても再考の余地があるというのが私の認識です。実際、自己評価もあっていいでしょうし、第三者評価だけでなく、場合によっては補助金採択団体による相互評価、さらにはアーツカウンシルの PO・PD によるヒアリングなども評価方法に組み入れていく可能性もあるでしょう。この文案だと評価指標だけを変えれば良いと捉えられ、8 ページにある KPI、つまりは数値目標を達成すれば良いという方針になってしまいます。特に今後検討される次期計画では、これまでより発展的な取組がなされるよう、評価については方法も含めた再考で指標の変更に止まらない議論のもとで、取組の現場に貢献できるようにという議論があったかと思われます。ぜひ、そうしたニュアンスを入れていただければと期待しています。以上です。

◎藤野会長

私の方から最初に、山口委員のおっしゃる通りで、繰り返しになるがというのは、私が付け足したところになります。10 ページの部分で先ほどご指摘いただいたところに、合理的な根拠があるかどうかを再考する必要があると思って既にも書いてあるので、その繰り返しということです。山口委員がおっしゃったように、目標値そのものと評価指標を同じところになるのか、分けていくのかということがあります。目標値というのは数字で出す具体的なもので、それに対して指標はそれも含めてもっと大きい概念ですね。厳密に言うと、後半のところは決して繰り返しではなくて、初めて言っていますね。それは正しいので、「繰り返しになるが」は取っても良いかなと思います。

○山口委員

これまでの議事録などを踏まえて文言を調整いただくということでいかがでしょうか。

●事務局

内容を確認して修正します。

◎藤野会長

本質的な点としては、この評価指標をこのままで良いのかどうかということですよね。（資料4）をご覧になっても分かるように、明らかに令和2年、令和3年のところで数値的に見るとガクンとコロナの影響で落ち込んでいるというのが見えます。令和6年度と7年度のギャップ、現状値と最終目標値を見ると、どう考えてもこれは追いつかないというのも分かります。特に文化施設の利用者数が年間150万人、それに対して今120万人ですから30万人一気に増やすというのは、数字を操作しないと絶対無理ですよね。もともと150万人ということにどういう合理的な根拠があるのかというのは、皆さんの知恵を出して考え直さなくちゃいけないかなと思います。

いずれにしても、評価指標として出てくるのが人数やパーセンテージ、ほとんどがそういう形になっているので、これで良いのかどうかということですよね。もちろん、堺市の大きな特徴は、委員の皆さんに年に数回、現地で視察いただいて、レポートを書くというのがすごく重要で、それがこの毎年の答申に活かされているところが他市ではあまりないすごく重要な特徴です。

その意味では定性評価もかなりきちんとやっている自治体だなと私は思っています。それを評価指標のところにどういうふうに落とし込んでいくのかということですよね。その辺も含めて皆さんのご意見をいただけたらと思います。

○雨森委員

山口委員がおっしゃっていたように、指標だけでなく、どのような手法で事業を評価していくのかということは、今後の課題かなと考えております。

13ページの文化芸術事業の認知度が30%を超える事業数というところが気になったんですが、この30%というのがどこから出てきたのかなというのが分かりませんでした。そもそも文化芸術の活動は興味のない人にとって、いくら広報をしても、見ていても、入ってこないという現状というのは、ずっと長らくあると思うんですね。そこに関わりを作ること、一歩踏み出すというような、きっかけづくりが重要だと思うので、パーセンテージだけではなくて、どれぐらいそのきっかけを作れたかという、そういう事業をやっていけるかということを評価することも考えられるかなと思いました。

そこで、12ページの最後の方に、さかいミーツアートの成果として、こどもたちが更に深めるために文化施設に通うようになったということ、文化芸術の専門への進路をめざすきっかけになったというようなことが書かれていて、「文化芸術で子どもたちを育てる」という方向性というのは、長期的に見ていくことですので、1回のワークショップではこの成果というのはなかなか出てこないと思うんですけども、その点が調査を追ってできているという点がすごく良いなと思いました。こういったところも長期的に見ていけると良いのかなと思います。

◎藤野会長

ありがとうございます。認知度をただ上げるだけだったら、例えば、市の広報誌がありますよね。別の自治体である委員からそういう話が出たのですが、その広報誌の中で割り当

てられているページで、スポーツはすごくたくさん取られている。2 ページあるのに文化は全くない。これで認知を上げられる訳ないじゃないかという、お怒りを持っている委員がいらっしゃって、文化は自治体の施策の中で過少評価されている気がします。

だから、その広報誌の中で比較的大きなページで文化を取り上げれば、認知度は多分上がると思うんですね。でも、堺のような大きな市になると、文化事業について割ける文字数というのはすごく限定されてくるので、ただ、こういうのがありますよっていうだけで良いのかという話にもなってくる。

認知度を上げるということになると、広報誌をどういうふうに活用するのかというのは、一つの手段にはなるかなと思うと同時に、文化芸術が必要な人に対する必要性というのはすごく難しいことだと思います。誰にとっても必要なものと、ある特定の人にとっては、なくてはならないものだという場合と両方あります。

特に堺市は社会包摂事業で、この人たちにはどうしてもこれを届けなくちゃいけないという人たちをしっかりと見定めて、そこに提供するようにしていますので、全体から見るとそれは 0.1%かもしれない。でも、そこにしっかり届いているのであれば、それだけでも文化政策の意味があると思うので、その必要不可欠な人にきちんと届けるということをちゃんと論理的に実証できると良いなという気はするんです。それも評価指標の一つとして、少し考える必要があるんじゃないかなと思います。

○上田プログラム・ディレクター

広報について、堺市には広報さかいというのがあり、そこに私の顔写真入りで載せていただいたことがあります。私は大阪市に住んでいますが、大阪アーツカウンシルのプログラム・ディレクターが顔写真入りで載ってる広報誌は見たことがないのです。堺市の広報はわかりかし文化芸術を取り上げていただいていて、勉強会交流会もその記事を広報さかいで見に来ましたという方が多いんです。

◎藤野会長

失礼いたしました。効果があるんですね。

私、3 月末まで 4 年間、豊岡市に住んでいまして、そこには隣保という、隣組みたいなのがあって、回覧板を回すんです。その豊岡市の隣保の回覧板には、神社でお祭りがありますとかイベント情報が入っています。城崎国際アートセンター「KIAC」があって、そこではワークショップとかショーケースをやっている、今こういうアーティストが滞在して、何月何日にリーディングをやりますとかね、ワークショップをやりみたいなのが隣保の回覧に必ずついてるんです。城崎国際アートセンターのイベントを市民に広く認知させるのはやはり大変なことなんです。でも、市民の合意を得るためには、どうにかして認知させようというので、かなり戦略的に隣保に必ず入れて見てもらうようにしてきたんだと思うんです。

この前、豊岡演劇祭の評価事業をやった際に、7 年振りに 1,200 ぐらいの市民アンケートを取りました。城崎国際アートセンターのワークショップとか行ったことがありますか

たいなアンケート結果は、10 年前と比べると上がっているんですけど、本当に数%だけなんです。

もちろん、関心のある市民というのは、数%いれば良い方なわけで、全戸配布していてもそういう感じなんですね。なので、城崎国際アートセンターは比較的先進的なアートですけども、そうじゃない社会包摂的なものについても、やっぱりこの人には届けなくてはいいないというところに届けるということはしっかり評価すべきなんだろうなと思います。

もう一つ、私の方からお聞きしたいんですけど、このアウトリーチでこどもに届けるというのは、さかいミーツアート等でやってきているんですけど、インリーチの方はどんな感じですか。例えば、フェニーチェ堺での小学校や中学校を対象としたオーケストラ事業みたいなものはどの程度今普及しているんでしょうか。

○堺市民芸術文化ホール企画制作担当課長

こどもたちがオーケストラを鑑賞する事業に関しましては、堺市教育委員会が小学校に声をかけて、高学年の児童がフェニーチェ堺で観賞する事業があります。堺市内の 90 校ある小学校のうちの 80 校以上が、フェニーチェ堺に 3 日間、他の小学校と相席になって鑑賞していただいています。

それとは別に、堺シティオペラさんと学校公演ということで、市内の高校生、中学生をお招きしている鑑賞授業もございます。

他にもインリーチと言いますと、知的発達障害児のための劇場体験プログラムというのがございまして、毎年 9 月にフェニーチェ堺でコンサートを実施しており、手話通訳や要約筆記を合わせて行っております。

◎藤野会長

ありがとうございます。財団が独自にやっているインリーチ系のものについては、この報告書には含めなくても良いんですか。

●事務局

どのように記載するかは次回の審議会までに検討します。

◎藤野会長

先ほどのお話だと、教育委員会を通じてやっているということですが、小学校が 90 校のうち 80 校でこれは全員ではないんですね。

○堺市民芸術文化ホール企画制作担当課長

はい、全員ではありません。参加されてない学校さんもあると聞いております。

◎藤野会長

ということは、キャパが 2,000 くらいあるとして何回ぐらいですか。

○堺市民芸術文化ホール企画制作担当課長

フェニーチェ堺以外の施設を使っているケースもございますが、フェニーチェ堺では2,000席のホールを使って約3日間2回公演を行っております。

◎藤野会長

全体のキャパで言うと、1万を超える訳ですね。かなりの人数ですよ。

●事務局

教育委員会主催で、館主催ではありません。例えば、滋賀県のような6年間に1回、琵琶湖ホールに行くように、堺市の小学生が6年間に1回、フェニーチェ堺に行くという形でやっているかどうか、そこは我々にも把握できていないところです。そこが館主催と教育委員会主催の違いかと思っています。

◎藤野会長

滋賀県で言うと、完全に館主催ではなく、教育委員会が当然絡んでいます。交通費で言うと、バスのチャーター代は教育委員会の負担なんです。琵琶湖ホールについては年々参加校が増えていって、最初は全額負担じゃなかったのが、今は全額負担になっているので、1万6千人ぐらい収容できるキャパに、今年は1万2千人ぐらい埋まっているみたいです。評判もすごく良くて、毎年内容も良くなるし、反応も良くなっているんで、理事会でもすごい評価高いですね。理事の先生が観に行くと、必ず感激したという話がありますし、それから市長や政治家の方とかにも観てもらおうようにしているんですね。そういうサラウンド効果もあって、支持はすごくされているかなと思います。

●事務局

堺市の場合は教育委員会の入札で行っており、大阪交響楽団さんが落札いただいております。大阪交響楽団は財団でのさかいミーツアートでも協力いただいていることもあり、プログラムはすごく工夫してやっていただいております。そういったことも学校の先生方にもステークホルダーとして広がっていると聞いております。

◎藤野会長

そういったインリーチ事業も答申書に書き込めると良いかと思いますので、宜しくお願いします。他いかがでしょうか。

○永井委員

答申の文案について、12ページの最後のところ、「同様に芸術家にとっても子どもたちに自らの考えを伝え、その反応を受け取ることは芸術家自身の感性を磨き、」というところなのですが、私の個人的な感覚かもしれませんが、芸術家というのは考えを伝えるだけで

はなく、芸術でなければ伝えられないことというのがあるのではないかと思います、それが演奏であるとか、演劇であるとか、作品で考えを伝えるということにもなるから、あまりこだわるべきではないのかなと思うのですが。

○永島委員

私も同様のことを思いました。芸術的な表現に変えてはどうでしょうか。

○永井委員

それから、この文案というよりも個人的な経験からなのですが、先日NHKのラジオ（関西の番組）を聞いておりますと、堺刑務所で緞通が売られていて、それが今ミュシャ館で展示されているということを伝えていて、とてもインパクトを受けるなと思いました。ちょうどこの6月からか、刑務所に関する法律が変わって、刑務作業が懲罰ではなくて、受刑者の更生であるとか、成長を促すということになったことを思い出して、このタイミングでこういうことを堺がやっているということはすごく先進的な活動で、美術館の宣伝のみならず、文化芸術ということを広く考える上で、とても重要な活動ではないかなと思いました。

あと、個人的なことですが、こどもが堺市内の小学校に通っているんですけども、今校庭が工事中なので、こどもが十分に遊べないから、こどもたちのために和太鼓の演奏家呼んで、何か演奏会をしたいと学校側が言っておられて、PTAで補助金を出せないかと審議されたんですが、個々の学校活動でも、そういうことを考えているんだなと。それが何か堺市と繋がりができると良いのかなと思った次第です。

◎藤野会長

ありがとうございます。教育委員会と市長部局の接続・連携はどんな感じですか。

●事務局

事業に関する情報共有というのは、適宜実施はしておりますが、密接と言われると、トップが違いますので言い切れないところもあります。財団が行っていますミーツアート事業についても、学校に周知の協力をした上でやってはおります。

先ほど申し上げたように、教育委員会が実施するインリーチ事業についても、充足率が何%とすぐ答えられなかったように、100%の情報共有が出来ているという訳ではないのかなと思います。

◎藤野会長

前回の審議会の時に私が質問させていただいた、部活の地域移行ですよね。これもどこの自治体でも頭を悩ませているところで、スポーツの方はスポーツ協会みたいなところに丸投げしても結構上手くできるけど、文化活動で出来るとしたら吹奏楽ぐらいで、それ以外の静かにやるような文化活動というのは日の目が当たらないですよね。今後どうなっていくのか不安なところがある中で、市長部局が文化担当をやるというのは、これまでとても良い

ことだと言われてきたんですけど、フェーズが変わってくると教育委員会との連携をした方が良いところもたくさん出てくるので、その辺も今後の課題じゃないかなという気がします。

それから、さっきの刑務所のプロジェクトはどこが主催していたんですか。

○公益財団法人堺市文化振興財団事務局長

ご説明いただいたように、堺アルフォンス・ミュシャ館の展覧会事業の一つとして取り組んだものになります。刑務所との関係で言いますと、クオ・ヴァディスというミュシャの大きな絵画があり、それが115年前のアメリカで織物の下絵として作成されたんですけど、その織物自身は作られることがなく終わってしまった。ただ、その織物自身を復活させたいということで、クラウドファンディングでお金を集めて、今回その制作ができたので、展覧会をするということになりました。

その際に、実はもうその手織り緞通というものを作れる技術というのが、堺刑務所にしか残ってなかったんです。そこで、作業の一つとして織られる方がいらっしゃったんで、そこをお願いしました。2、3年かかりましたが先日出来上がってお披露目したのが、NHKのテレビやラジオに取り上げられ、特に刑務所の受刑者が作業されたというところに、すごく焦点を当てられた報道になっていました。

○さいとう委員

部活動についてどんどん学校が手放しているという状況ですが、この間、山口県防府市に行ったんですけど、防府市が部活動を手放したと聞きました。やっぱり行き場のない中学生がいて、その子たちのために、図書館のボランティアさんと一緒になって、本好きのこどもたちを集めて活動していこうかという動きが始まったということを知りました。

地方だけでなく、他府県もそういう動きになっていくと思うので、そういうことにこそ補助金を使って発展させればいいんじゃないかなと思いました。

◎藤野会長

特に文化系の部活の地域移行をするに当たって、こういう活動をやりたいという、市民の中の発案をしっかりサポートや、そういうことに対しても調整できますよということを、今度の補助金の申請の時に例として挙げたらどうですかね。あまりそういう発想がないかもしれないですね。

●事務局

堺市も教育委員会中心に、庁内で協議をしております。私も市長部局でスポーツ推進課長と一緒にその委員会に入っております。

ご指摘のように、スポーツの方は、例えばブレイザーズのバレーボールのチームや、シュライクスという野球のチームがあるので、そのプロチームが担う授業を行っていますが、文化系はまだ実例がございません。藤野会長がおっしゃられたように、吹奏学を中心に議論を

していくところです。ただ、先ほど話させていただきました大阪交響楽団というプロのオーケストラがありますが、コスト面で合わないかと思います。例えばブレイザーズはバレーボールチームで、社会的な貢献として、企業が外に出て普及活動を行っていくところではありますが、大阪交響楽団はプロオーケストラとして生業を立てていらっしゃいます。どこまで学校の部活に対してプロオケの方が教えて、コストに対する見合いがあるかどうかというお話は、理事長ともさせていただいておりました。

ただ、補助金は主体が学校ではなくて、地域が学校に対して文化芸術を届ける、部活のサポートをするのは対象になると思います。補助金を幅広い用途に使っていただく周知を考えていきたいと思います。

◎藤野会長

宜しく申し上げます。さっきの 12 ページの下から 3 行目「こどもたちに自らの考えを」については、「芸術的表現を」に変えると良いかなと思います。

○坂東委員

8 ページの表に記載があります、「坂田三吉名人杯将棋大会」部分が文字化けしているので、修正いただければと思います。

●事務局

失礼しました。修正致します。

○藤原委員

先ほど会長がおっしゃられた、必要な人に必要な文化芸術を届けるということについては、学校単位でのアウトリーチ授業や、地域でしたら子ども食堂で行われている。本当に昔から比べるとずっと良くなっているなと思います。広報についてですが、世の中において余暇を過ごす楽しみというのは、色々なものがあると思うので、堺市がこれは素敵な文化芸術ですよというふうに広報しても、なかなかお客さんが集まらない状況でもあると思うんです。なので、他市が取り組んでいないような、派手な方法と言いますか、変わったやり方で、もっと来てほしい人に歩み寄るような広報なんかも考えていく必要があるんじゃないかなと思いました。

◎藤野会長

今は最初に評価指標をどういうふうに設定するかというところから議論がいろいろ出てきて、これまでの最終評価の中で取り込めてないような、あるいは取りこぼしがあるようなところを、どうやってこう拾っていくかという話になったと思うんですね。

この次は次期計画にそれぞれ、どう反映させていくかという、発展形になっていくと思うんです。今の藤原委員のお話だと、今後の企画内容としての独自性があるんですね。

○藤原委員

堺ならではの独自性のあるものをぜひ考えていただきたいなという思いがあります。例えば、堺に本社のある企業とコラボしたり、南海電鉄のような大きな企業とコラボするようなこともあれば良いと思います。以前、南海電鉄にラッピング電車というのがあったんですけども、ハニワ部長がアニメで登場するような形で、茶の湯を楽しんでいる姿ですとか、堺の注染の絵が書いてあるもの等、本当に堺らしいラッピングがありました。大企業とコラボするような集客、広報活動というのもぜひ考えていただければなと思っております。

○永島委員

先生方がたくさんご意見を出してくださっているのは、その通りだと思うんですけども、やはり広報というのも全方向でしなければならないと思います。広報誌はもちろん必要ですし、藤原委員がおっしゃったようなキラキラするような、街の文化財のライトアップみたいなものがあるのも良いかと。今研究でパリを調査していると、パリの街というのはエッフェル塔がライトアップされていて、夜になったら1時間に1回ライトが光ってキラキラすると、やっぱりみなさん惹きつけると思います。

そして、クラウドファンディングやふるさと納税でも何か体験があるプログラムを入れたりすると全国的な周知ができるかと思えます。

この答申書ですが、やはり市の事業であるというクレジットをもう少し伝えていく努力、前会長からおっしゃっていたことですが、各事業に関してこれは堺市の事業だと知らせる必要があると思います。受け手は良い事業だなと思っていても、実際それが堺市の事業であると繋がっていない場合が結構あるので、しっかりと伝える努力をしてもらいたいです。

そして、抽象的にこの事業があったと答申書に書いていくのも良いんですけど、実績の事例でも良いので、記載したリストがあるとより具体的にイメージしやすくなるかなと思います。

◎藤野会長

今のご提案もどこまで取り入れられるか、簡単な表を入れるということなんですが、今回こういう形の答申書で最終報告というのは初めてですよね。前はやりましたか。

●事務局

1期目の時と内容、記載は変わっていますが、5年間のまとめた答申書というのはこれが2度目になります。

◎藤野会長

今回の答申書を最終系になるべくしたいと思っていますので、これを微修正で終えるとして、今度は次の第3期ですよね。第3期に話を移していきたいんですけども、この評価指標と言われているものを、もう少し評価方法そのものを見直すということに時間をかけて取り組んだら良いかなと思うんですよね。そのことによって年度評価、それから最終評価の

書き振りが第3期では変わってくるかなと思います。評価指標にすぐ入るんじゃなくて、その評価方法をどうするかというようなところも少し議論にしたら良いのではないかなと思います。

その他、細かい修正に関しましては事務局と会長一任にてご了承ください。

議題

(2) 第3期堺文化芸術推進計画の策定案について

◎藤野会長

では続いて、「議題(2) 第3期堺文化芸術推進計画の策定案について」事務局からご説明をお願いいたします。

<事務局より説明>

◎藤野会長

今、最後ご紹介いただいた参考資料3なんですけれども、実施したのはいつですか。

●事務局

昨年の8月頃で、毎年やっております。

◎藤野会長

昨年の8月で、毎年やっているということは経年変化が見られますね。そうすると、少なくとも第2期計画の最初と去年のデータが見られる、コロナ禍が挟まっているので、相当歪んだデータになると思うんですけど、やはり経年変化が知りたいですね。第2期計画があることによって、どの部分がどういうふうに変ったのか、特に認知度のところ。それを出してもらうことで強みや弱みは掴めるのかなと思います。

第2期の評価検証を行っていきまして、細かい内容については、次期の審議会に任せるとしまして、先ほどの議論も踏まえた上で重点的方向性、それからもう一つは評価指標、指標以前にその評価の方法をどうするのかということについて、これから皆さんのご意見をいただきたいと思います。

重点的方向性の方からいきましょうか。この第2期の重点的方向性に対しての見直しのご意見はございますでしょうか。次の第3期計画をどうするかという内容の資料は出してくださいでしょうか。

●事務局

今回の7月審議会では議論をスタートしますので、第3期計画の基礎資料となるものをお示ししたいと思います。本日、ご議論をいただいて、重点的方向性は、第2期は3つありますけれども、その部分をいただいた意見をもとに構成して、それをまた見ていただきながら

議論いただきたいなと考えております。

◎藤野会長

まず重点的方向性 1、2、3、これを以って先ほどの評価検証を行った訳ですけども、次期もこの柱は大きく変えないでいった方が良いというご意見もあるでしょうし、やはりもう時代が変わったんだから、プラスアルファや引き算も必要という考えもあると思いますので、その辺あたりはざっくばらんに出していただければと思います。

○永井委員

前回の審議会の時に、重点的方向性 3「多くの人に魅力を伝える」に関して、私自身の見解として多くの人にといいと、どうしても数を指標にしてしまうという話をした時に、会長が多様なということをおっしゃられたのが印象に残っておりまして、この「多くの」というところで、「多くの」も大事ですし、更に良い表現があるかなと思ったことが一点です。

あと重点的方向性として国際的なものというの必要なと思ひまして、私事ですが、先日チェコの演劇がフェニーチェ堺でありまして、私も拝見したんですが、個人的にはすごく良いなと思ひました。チェコの方もいらっしやっていて、チェコ領事館も堺にありますし、そういう海外・アセアンとの繋がりなどもあるので、国際的な広がりを持った視点というのがあると良いなと思ひました。

◎藤野会長

ありがとうございます。フェニーチェ堺、財団を通して行う事業と、そうではないアーツカウンシル等、行政でやる事業等をどういうふうに分けていくのが難しいですよ。行政でできることはマンパワーもありますし予算のこともあるから、限られている中でこの重点方向性 3 つに今絞ってやっています。チェコの演劇は堺市とフェニーチェ堺が主催の事業だったと思うんですが、フェニーチェ堺の事業として、国際性のあるものをかなり重点的にやってもらいたいということを、審議会として方針に立てることができるんですよ。越権行為ではない訳ですよ。

とにかく私自身もこの 5 年ぐらい反省すると、やっぱりコロナ禍の 2 年半ぐらいは国際交流的なものはほとんどできなくなっていて、その時に例えば高校生だった演劇部やダンス部、コーラス部等は本当にかわいそうだった訳ですよ。人生の中の成長する 2 年、3 年だった訳ですから相当大的な損失だった。本来だったらホームステイとかもできるような人たちがそれもできなかった。国際交流というのも一気に後退してしまつて。

他方、円安が極度に進み、インバウンドはどんどん増えてきている。ただ、アウトバウンド、私たちが海外に行こうとすると、もうえらく大変な 30 年前、40 年前に戻ったような状況になっています。その中で草の根的な国際交流事業というのは、僕はすごく重要だと思うし、日本が、特に若い人たちが海外に興味がない。もう世界情勢は劇的に変化をしているし、地球環境も劇的に変化してるんだけど、そういったことに関心が薄いというのは、日本の将来にとって決定的なダメージだと思ひています。なので、文化芸術を通して世界を知る活動

というのは、次の時期にはかなり強化しなくちゃいけないんじゃないかなと。これは一つのポイントですね。

○坂東委員

永井委員がおっしゃったように、多くの人というのは数だけが評価指標になってしまう、というのは本当にその通りで、私も多様なというようなニュアンスの重点的方向性に変えた方が良い時代に来ているのかなと思います。そうなった場合に評価指標というのが来館者数とかでは測れなくなってくるので、その来館者の割合として、例えば海外の人何%や、学生何%に移ってくると思うんですよ。それは統計として出せるのかなと思って。多様な人にするのは、私は本当に賛成なんですけど、その場合の評価数として出すのが難しいんじゃないかと少々懸念があります。

◎藤野会長

今は個人情報のこともあるので、アンケートの取り方も大変ですよ。数だけカウントするのは簡単なんですけど、その中身まできっちり分析するというのは、パイロットケースでやるのはできるかもしれないですけど、全体に網をかけるというのはちょっと難しいかなと思います。

ただこれは方針なので、文言をただ単に増す数値ではなくて、多様な、ダイバーシティに変えるというのは、僕は十分あり得るんじゃないかなと思いますけどね。

○山口委員

2つありまして、直近で出てきたところと言うと、おそらく質的なデータを数量化して分析する必要があると捉えています。つまり、成果が何かを明確にする上では結果をまず数量化することです。例えばこどもたちが参加できるように、ひらがなだけのチラシが作られたものが何種類ある、といった具合です。もちろん、そうして数を取り上げる際には分母も問題になります。ひらがなのチラシばかり増えればいいわけではなく、何より堺市内の全ての事業がいくつあるのかを数えるだけでも大変です。とはいえ、目標を定めるのは何らかの望ましい状態を提示するということですから、文化や芸術の活動団体の方々にそうした状態を共に実現していこうという関心が高まることが重要です。そのため、質的なデータを数量化することによって到達目標を具体的に表現することは可能でしょう。先ほどはこどもたちの参加を促すという観点でチラシなどの案内文の表記を評価対象にする、という例を示しましたが、多文化共生という観点からは何か国語のチラシやウェブサイトがあるか、そういう展開も含まれるでしょう。

先ほどの藤野会長のご発言に関して、例えば ChatGPT などの生成系 AI に翻訳を任せるという方針に割り切ることで、日本語版のみの提供とし、外国語については「こちらをご覧ください」と案内することによって、単なるポーズではなく、きちんと配慮が行き届いているということを浸透させていく運営もありうるでしょう。そうしたあり方が次の 5 年間で浸透するように展開することは、決して不可能ではないと認識しています。

これらを踏まえて、「分母に対する分子がどのように達成されるのか」という視点から考えると、「何がどうなったら良いのか」という評価の対象を明確にすることが不可欠となります。漠然と「良くなる」だけでは評価は困難ですし、運用次第では見せかけだけの成果が示されてしまうことを危惧しています。実感は伴っていないのに、結果だけが独り歩きする状況は、表現の調整次第で作り出してしまうので、注意が必要です。とはいえ、○や×で「出来ている」あるいは「出来てない」の判定を点数化して数値に換算にしていく定量的な評価は、チェックリスト方式でも可能です。

一方で、「重点的方向性をどうするか」という点は、前回の議事録にも残っている通り、堺市の基本計画との連動が重要と捉えています。国がめざす文化芸術の振興にどう貢献するかに加えて、堺市における今後5年間の動きと連動を図るかの視点も不可欠でしょう。今日は自由な意見交換の場と認識していますので、ここで方向性を決定することはないと思われませんが、現時点で示されている3つの重点的方向性について、その主語にブレがあるように感じます。例えば1番目の「文化芸術とともに生きる」と言う時、それは誰が生きるのでしょうか。続けて、2番目の「育てる」のは誰か、そして3番目の「伝える」のは誰か、といった具合です。もちろん堺市役所、堺市民などが想定されているのですが、場合によっては芸術家や各種団体が担い手とされることもあるでしょう。

ですので、その主語が明確に据えた上で、誰によって何が行われるのかを踏まえれば、指標の設定を含めた評価の枠組みの設計方針は自ずと定めやすくなり、質的なデータの数量化も盛り込むことも出来るかと思われます。重点的方向性は大きく国際的な観点の重視、多様性への配慮、万博レガシーを踏まえた視点、これら3点から外れることはないでしょう。むしろ、国の基本的な方針、コロナ禍を経た情勢の変化、そして堺市の次期基本計画、これらを踏まえて方向性を設定することこそが、重点的方向性ではないかとも考えています。

◎藤野会長

大変重要なご指摘で、国の基本方針と堺市の基本方針ですか。それと整合性をとっていくというのは、次回の審議会の時にぜひやりたいと思います。

それから、量的なデータをどうやって数値化するか、山口委員何か良い事例ありますか。

○山口委員

質的なデータを量的なデータにする手法としては、例えば災害復興の度合いを評価する際に用いられている工夫が参考になりそうな気がします。ただ、現時点ですぐ「これが使えます」と提案できる事例は思いあたらないです。例えば「復興感」の評価として、主観的な感覚を地域全体の傾向として可視化しようとする取り組みがあります。実際、橋が出来たら復興かと言われれば、必ずしもそうではないためです。つまり、物理的な整備と主観的な復興感の間にはギャップがある、ということです。

そこで提案ですが、アーツカウンシルの皆さんで勉強会や交流会を行い、それらを踏まえて調査した結果をもとに、堺市として用いる評価の枠組みを整えていくのはいかがでしょうか。そのようにして作り上げられた枠組みであれば、堺の現状に即しているとともに、多

方面から信頼できる評価軸となるはずです。先ほどの例で言うと、堺での取組を紹介するチラシがひらがなで書かれていた場合、子どもたちがそれを自分で読み、行きたいと判断できたかどうかを確認してみる、という場面が想定できます。さらに、10 種類のチラシを持ち寄り、それぞれにどのような変化が見られたかを比較することで、堺市における広報の見せ方の工夫について、評価の観点を具体的に把握することができるでしょう。このように、「以前はこうだったが、今はこうなっている」といった変化をイエスノーで評価して比較することによって、活動の充実に向けた変革の手がかりを、評価そのものを通じて得ることができます。このことは、評価に対する疑問や抵抗感を和らげる効果もあわせ持つのではないのでしょうか。

次期も私は継続して委員なので、こうした点を宿題として持ち帰らせてください。復興感の評価が例として応用できそうと感じたところです。

◎藤野会長

次期計画について他にご意見はありませんか。

○雨森委員

前回の第2期からの課題をきちんと抽出する、現状を把握するということから、どう第3期に向けて重点的方向性を再考していくかにつなげていく必要があると思うので。現状の把握と課題の抽出は、次回の会議の時に情報としてあると良いのかなと思います。

また具体的なことを言うと、先ほどから上がっていました中学校の部活の地域移行に関しては、盛り込む方向で考えられると良いのかなと思っています。

◎藤野会長

ありがとうございます。次期も委員をされる方は次回の審議会ですら十分に議論していただければと思います。

それでは、これにて第1回堺市文化芸術審議会を終了します。ありがとうございました。